

ヘシカズム論争の指し示すもの

——グレゴリオス・パラマスと東方教会神学

大森正樹

はじめに

大森でございます。今日はよろしくお願ひします。

先ほど紹介していただきましたように、私は、初めはエックハルト（1260頃・1328頃）を勉強してまいりました。当時、エックハルトというと、日本ではこちらの研究所も仏教系ですが、禅との関係で語られることが多くて、特に京都大学の西谷啓治先生とか、上田閑照先生とかがそういう方向でした。しかしエックハルトはカトリックの修道者ですから、仏教との関連を

説くのは日本人にとっては興味深いことですが、エックハルトの思想の真意に迫るためにはそれでは無理ではないかと思ひ、エックハルトのラテン語の著作を中心に研究してみようと考えたわけです。エックハルトには当時のドイツ語（中高ドイツ語）で説教したものが残っていて、読んでみるとその説教のほうが無断面白くて（これが禅の悟りに近いと思われたでしょう）、ラテン語のほうは通り一遍のラテン語で書かれていて、言葉自体もそつけないものです。読んでいる者の心が躍動するという体のあるものではありません。しかし、その

方が実は西洋思想にわれわれ日本人が肉薄し、それを解明していくためには重要だと思ってやっています。

そういうふうにはエックハルトをやっている最中にあることについて論文を書かないかという依頼がありました。それはディオニシオス・アレオパギテースという、本当はどういう人がよくわからない人なのですが、その人の教育思想について書くようにというものでした。このディオニシオスの研究書みたいなものが何冊かあって、それを読んでいううちにだんだん、エックハルトよりもディオニシオスとか、彼にまつわる東方のキリスト教の方が面白くなってきたというか、大いに興味をもつようになったわけです。今では立派な方々がエックハルトをやつてくださるので、私は安心して自分が面白いと思つた方に移っていきました。

初期キリスト教

日本ではキリスト教と言うとカトリックやプロテスタントが知られていて、東方キリスト教というと一体

これは何だということ、あまり馴染みがありません。ところでこの研究所の研究会では、以前に、カルケドン公会議ぐらいまでは勉強をすまされたとお聞きしました。しかしこの「カルケドン公会議」というのは非常に重要なので、そのあたりをもう一度お話をさせていただきます。皆さんにお渡ししています「ローマ帝国の四分割統治」の地図を見てください。ローマ帝国というのはイタリアのローマから起こってきたのですが、年月が経つうちに非常に広い範囲にわたつて征服してしまつた。つまりイギリスから中近東、それからアフリカの北までを含む本当に広い地域が「ローマ帝国」という一つの国家だったので。当然なことに、人種や言語というものも必ずしも一様ではありません。

それで、これを一人の皇帝で治めるのは大変だ、ということ、ディオクレティアヌス帝のときに(286年)帝国を東西に二分し、293年には東西それぞれに正帝と副帝を置いて、四分割の統治をしたわけです。ところが、この時代の統治者たちは権謀術数にたけ、権力欲が強いので、自分の領分だけで満足せず、だん

だん他人の領分を侵害して自分が頭領になろうとします。そういう争いがたえず帝国をかき乱していたわけです。しかしこの東と西を分ける線はだいたい東経19度ぐらいになっています。それでこの線の右側を東、左側を西としますと、大体東が東欧、西が西欧で、今日にも通用する区分になります。この線を境にして人々のメンタリテイや言語、その他色々なものが違ってきています。

キリスト教は、もともとパレスチナでイエスという人が社会の底辺にいる人々に語りかけ、彼らが決して神に見捨てられてはいないと勇気づけたのですが、最後は、十字架刑という悲惨な刑を受け、亡くなり、イエスの没後、イエスの弟子と称する人たちが、師イエスの使信を引き受けるかたちで成立したものです。しかしイエス自身は新しい宗派を創ろうということは特段考えていなかったのではないかと思います。

ですから、当時キリスト教はユダヤ教ナザレ派のような感じで、言ってみれば一つの新興宗教、あるいはユダヤ教の分派のように考えられていました。ただし、



ローマ帝国の四分割統治（テトラルキア体制）に基づき、4世紀には「イタリア道」「ガリア道」「イリュリウム道」「オリエンス道」という4大行政区画が確立された

後に弟子たちの間にだんだんと自分たちのアイデンティティーが生まれ、自分たちの考えは他のユダヤ教の考え方とだいぶ違うのではないか、自分たちはキリスト教徒なのだという意識をもちはじめ、キリスト教が生まれていったのではないかと思えます。しかしその後比較的早くこの教えは地中海世界に広まっていったようです。

ところでキリスト教は都市型の宗教と言われていて、農村にはあまり浸透しなかったようです。農村は古来の慣習や色々なものが根強く残っているので、当時もキリスト教のような新興宗教が農村に入っていける余地はあまりないわけです。日本でも農村の方はキリスト教の浸透がなかなか難しく、教会があるのは都市部に限られている所が多いです。

当時の地中海世界において都市というのは「永遠の都」と言われているローマ、そしてイエスが処刑されたエルサレム、エジプトのアレキサンドリア、アンティオキアというトルコに近い町などで、非常に繁栄した大都会でした。

ところが、ローマ帝国西部の副帝であったコンスタンティノス（272頃・337）という皇帝が、下剋上のような形で西部の正帝となり、遂にローマの単独皇帝になりました（在位324・337）。帝国は版図が非常に広いので、彼は帝国の東の方に注目して、現在のトルコのイスタンブール、当時はビザンティウムと言っていた小さな町へ都を移したのです。これを「コンスタンティノスの町」という意味で「コンスタンティノポリス」と呼びます。ですから、帝国の中心がかなり東のほうに偏った感じになった。こうしてローマ帝国の中に新たな都市としてコンスタンティノポリスが加わり、都合この五つの町が当時の地中海世界において主要な町ということになったわけです。

キリスト教が広まっていったのは都市が中心ですが、都市というのは地元の人だけではなくて根なし草的にコスモポリタンというか、どこかから流れて来て住み着いた人が多いので、新しいものの考え方や思想に順応しやすいのです。そういうことで、いま言った五つの大都市周辺にキリスト教が伝播していったわけです。

さてこのコンスタンティノスが、キリスト教を利用して帝国を統一しようと考えて、積極的にキリスト教を採用したわけです。しかし、コンスタンティノス大帝自身は長くキリスト教徒ではなかったようです。亡くなる少し前に洗礼を受けましたが、それも異端と言われたアリウス派の洗礼を受けたと言われています。「十字架の印がついた旗を掲げて戦えば勝利を得るのだ」というお告げを受けたということになっていますが、そういうやり方で彼はそれまで迫害を受けたキリスト教を安定化させた。

キリスト教はこの五つの大都市に組織上の責任者を置きました。それを「総主教」と言います。こうして、だんだんとキリスト教の世界が形作られてきました。

キリスト教はローマ帝国の統治スタイルに学んだように、州のようなものの中にある大きな都市に主教を置いて、地域ごとにまとめていくようなことをやりました。たとえば日本のカトリック教会ですと、教区と言って、東京教区、横浜教区、名古屋教区、大阪教区などに分かれていて、その教区ごとに司教（カトリック

クでは主教を司教と称す）を置いています。

キリスト教のかかえる問題点

皆様ご承知の313年に「ミラノの勅令」が出て、キリスト教が受け入れられ、やがて国教となつていったわけですが、キリスト教はその成立の当初から非常に厄介な問題を抱えていました。それは信仰の問題だからということもありますが、われわれの普通の常識では考えられないようなことをキリスト教は語るので、その第一はイエス・キリストに関することです。

たとえばイエス・キリストは立派な人だとか、あるいは人間以上の方だとか、色々なことを言いますが、そのときに「非常に神に近い人だ」、いや「神だ」と考えることもあれば、「いや、人間にすぎない」と考えることもあり、そういうようなことが様々に取り沙汰されたわけです。キリスト教では重要なことを決定していかうとするたびに会議を開くわけです。この会議を「公会議」(ecumenical council)と言います。「エキュメニカル」というのはもともと「オイクメナー」という

ギリシア語でから来ていて、「人が住んでいる土地」という意味ですから、いわば「世界(全地)」ということになります。ですから、世界大での会議だということですから、もちろん、当時の世界意識は地中海に限られているので日本や東洋は入っていませんが、そういう会議に各地の代表者(司教〔主教〕、および神学者たち)が集まってキリスト教の懸案事項を論じるのです。こうした幾つかの会議において問題になったことの一つが先ほど触れた「キリストをどう捉えるか、どう考えるか」ということです。

公会議において一旦「キリストはこうですよ」と決まれば、それに対し「そうではない」と言えば異端として弾き出されます。異端と定められると、「その考えを改めます」とでも言わないかぎり、教会には戻って来られない。それで異端とされた者は教会外(地理的にも)へ出て行き、後は正統派とされた人々が色々なことを決めていくわけです。このような公会議として、ニカイア公会議(325年)、エフェソス公会議(431年)、カルケドン公会議(451年)などがあります。

キリストは全く純粹に人で、人以外のものではないという考え方もありましたが、この主張はわりと早い時期に唱えられなくなったようです。それに対して、キリストを「人と考えるか神と考えるか」という微妙なことが非常に大きな問題になってきて、エフェソスの公会議が開かれました。ここではネストリオス(381頃・451、アンティオキアの修道院出身)というコンスタンティノポリス総主教の発言が問題となります(アンティオキアの修道院出身)。というのは、ネストリオスはキリストの、いわゆる神学的用語で「人の性(人性)」とか「神の性(神性)」とか言われていることに關して、どちらかというキリストの神性と人性を区別して考える傾向をもっていました。当時問題になったのは「聖母マリア」の呼び方で、特にアレキサンドリアを中心とするエジプトの人たちは、マリアはキリストを産んだお母さんだが、キリストは神だから「神を産んだお母さん」だということで「テオトコス」と呼んでいた。「テオス」はギリシア語で「神」、「トコス」は「産む者」ということです。それに対して、ネストリオスは、神

は人間を産むわけにはいかず、人間が人間の子どもを産むのだから、マリアは確かに「人間」キリストを産んだので、「テオトコス」ではなく、むしろ「キリストを産んだ母」、つまり「クリストトコス」と呼ぶべきだと言ったのです。

このときアレキサンドリアの主教、キュリロス（444）とネストリウスの間で激しい論争になった。そのためにこの公会議が開かれてどちらが正しいかを議論した。結果的にネストリウスは排斥され、キリスト教のサークルの中にいることができなくなって、コンスタンティノポリスから外に出て、今で言うイラクあたりにネストリウスを信奉する人々が逃れて行った。そこで神学校を造り、彼らのキリスト教を形成していった。これが、後に中国にまで行った「景教」で、弘法大師・空海が長安にいたころに多分、景教の寺院を訪れたのではないかなどと言われているものです。つまり、キリスト教の教会ではこういうやり方で、どちらが正しいか間違いか、正統か異端かということが争われ、異端になった者が弾き出された。そこでネスト

リオスが排斥され、次にキリストの人性と神性をどのように調和的に考えるかということが問題になり、それがカルケドン公会議で議論されるわけです。

結論は、「キリストは神でもあるし人でもある」ということです。つまり、われわれの通常の常識からすれば、そんなことはあり得ないということを採用したわけだから、その限りでは非論理的です。しかし、人間の救済にかかわる信仰の上ではどうしてもそうでなくてはならないということで、それが正しいという結論です。カルケドンではそう宣言をしました。しかも、神性と人性はキリストにおいて混合されることもなく、変化することもなく、分割されることも、分離されることもない。だから神でもあるし人間でもあると結論づけたいわけです。そうすると、「キリストは神だ」と主張した人は異端になったわけですが、その人たちのことを「単性説派」、あるいは「単性論派」といいます。

「単性説」を採った教会はアンティオキアに近いシリアの教会、アレキサンドリアに近いコプトの教会、それにアルメニアの教会です。そして正統派のカルケド

ンの公会議決議を受け容れたのがローマ教会と、コンスタンティノポリスにあるビザンティン教会の二つです。このように教義的なことをもとにして、キリスト教の教会はさまざまな仕方で分裂していきました。

もうおわかりだと思えますが、単性説を取った教会は現在のイスラーム地域の教会で、イスラームは7世紀に起こります。これもいろいろなことがあるようですが、単性説の考え方はイスラーム神学に大きな影響を与えているという研究もあります。それからローマ帝国というのはコンスタンティノポリスやローマを中心としますが、アンティオキアやアレキサンドリア、あるいはもつと東のほうは帝国から見れば周辺です。北アフリカは穀倉地帯で麦を作っています。彼らに一所懸命畑をやらせておいて、食べるのはローマです。そうすると、今流に言えば「俺たちは働かされて、美味いものは他の連中が食っている」となって、どちらかと言うとローマ的・ビザンティンのものよりは、アラビア半島から起こってきたイスラームのほうが仲間に近いという気があって、ビザンティンにつくより

はイスラームについたほうが自分たちのアイデンティティーが守れるという感じで、イスラームが起ったときに、もちろんいろいろな争いはあったでしょうが、わりと容易にイスラームの支配下に入ってしまったようです。

中東は現在、また色々問題になっていて、エジプトにはコプトというキリスト教徒がいますが、最近コプト教徒がイスラームの人から迫害を受けています。また、アフリカでキリスト教徒を狙って虐殺したということもありました。こうしたことは宗教的なことをめぐる争いのようにも一見見えますが、単純に「イスラームかキリスト教か」というような信仰の問題というよりも、それより先に貧困や格差などの経済的問題が重要な位置を占めていると思います。イスラーム内部においても、シーア派とスンニー派で争っています。両派が生じたのはムハンマドを継ぐ者がだれかということに端を発しますが、アラブ諸国においてはこの両派の主導権争いが中心の問題だと思えます。中東というのは政治的宗教的に非常に複雑で、安易な判断は避

けなければならぬでしょう。

ローマ教会とビザンティン教会を

取り巻く環境

イスラームの隆盛とともに、だんだんと単性説派の教会はキリスト教としての力をあまり持たなくなり、その代わりローマ教会とビザンティン教会が力を持つようになってきました。つまり、カルケドン派の教会です。この二つの教会が合い携えてキリスト教教会を支え合ってくればよかったです。そうでもなくなつたのです。と言いますのは、ローマ教会はラテン語の地域にあり、ビザンティン教会はギリシア語の地域にあります。ローマ人というのは、古来、土木建築に秀で、その成果が水道橋や帝国中をめぐる道路です。この道路のおかげで人も物資も帝国内を流通していったわけですが、彼らは非常にプラグマティックというか、実際的なことに長けています。

また「ローマ法」というのがあって、これは法律の先祖みたいなものですが、帝国の基礎に法を置いたわ

けです。つまり、ものごとを法的に考える道が開けたと言えます。片や、ビザンティンのほうはローマのようなプラグマティズムというか、実際に何か物を作ったりしていくというよりは、どうも議論するのが好きなので、それも複雑な議論をするわけです。

ビザンティンは、東の方でイスラームが興つていたので、それへの備えをいつもやっていたかなければならない状況です。この頃のヨーロッパの北の方は、まだ不毛な土地だと思ってください、文化などがまだ十分に育っていない地域です。

ローマ教会はイタリアの北から出て、アルプスを越え、ガリア（フランス、ケルト人たち）それから西のイベリア半島の方に広がり、次いでゲルマンの方に広がっていきわけです。先ほど触れたように、ビザンティンの人は非常に細かい議論が好きで、ローマ人は実際的にどのように世界を造っていくかに力を注ぎます。しかしガリアやゲルマンになつてくるとそういう知的な訓練があまりないので、要するに戦士の集団で、強い。そのような国が色々と興ってきて、そこにキリスト教

が入って行き、その土地をキリスト教化していった、次第に、その人たちもキリスト教の世界に組み込まれ、文化を身につけていくわけです。ですから、ローマ教会というのは背後にゲルマン、当時の言葉で言えばフランク王国を抱えています。彼らはローマにとつては軍事的後ろ盾になったでしょう。片や、ビザンティンはいつもイスラームと相対峙していないといけないという緊迫した状況がある。

両教会が遭遇した問題

「キリスト論」つまり「キリストとはどういう方であるか」については、一応カルケドン公会議で片が付いたとされます。しかし本当は片付いたとは言えないところがあって、後年問題が再燃しますが、それは一応今置いておくことにします。

さて次に問題になってきたのが「三位一体論」です。御存じと思いますが、これはイスラームからいつも攻撃されてきた教義です。神に「父と子と聖霊」という三つの位格があるとは一体どういうことだ。一神教と

言っていないながら、全然一神教ではないではないか、といったような批判です。確かに一神教という観点からはイスラームが言うことはあたっています。だから、非常に厳密な意味で言うなら、一神教というのはイスラームだと思います。それに次ぐのはユダヤ教で、キリスト教になるとやや曖昧な感じを与えます。神に「父と子と聖霊」という区別を導入していますから。もちろんキリスト自身は神には三つの位格があるとは言っていません。生前のキリストの言葉をもとに、聖書の記述や神と人間の関係、人間の救済や存在の意味などを考えあわせて、キリストの弟子や後代の神学者が、神を「父と子と聖霊」の三位格をもつと考えることがふさわしいとしたのです。

多分この考えはキリスト教徒にとつて、神との関係を結ぶときにいわば実存的な根拠を与えるものであったでしょう。しかしここにも問題がありました。それはこの「位格」という言葉ですが、教父たちがこの教義を規定したときに使ったギリシア語は「ヒュポスタシス *hypostasis*」というものでした。ここで「ヒュポ

というのは「下の方」を意味します。「スタシス」というのは立つということ、「下に立つ」ということです。下に立つものはものの基礎であり、それを支えるものです。だから、何か根底にあるもの、という意味があります。試みに「ヒュポスタシス」というギリシア語を辞書で調べると色々なことが書いてありますが、最後のほうには「泥みたいなもの」とか「沈殿物」というような訳語も付いています。基体的なもの、個的存在を表します。

問題はまずこうした用語にあります。当時はどちらかと言えば、東方のビザンティン世界が政治的にも、文化的にも主導権を握っていましたので、公会議文書はまずギリシア語で起草されました。コンスタンティノポリスにあるビザンティン教会に次ぐ有力な教会はローマを中心とするローマ教会です。ローマは御承知のようにラテン語の世界です。言語が違います。また両教会を構成する人たちの人種的違いもありました。このような言語の違い、メンタリテイの違いが問題になってくるわけです。ですからギリシア語で作られた

草案を次にラテン語に翻訳することになる。ギリシア語の文書をラテン語に訳すとき、両言語は同じインド・ヨーロッパ語族に属すると言っても、やはり細かいニュアンスは翻訳によって削がれてしまいかねません。

問題は「ヒュポスタシス」という言葉です。これをラテン語に直訳すると、「ヒュポ」は「下」という意味だから「スプ」と置き換え、その結果「スプスタンティア」とか「スプステンティア」となります。これは、英語なら「サブスタンス」ですね。「実体」というような意味です。ところがラテン語の世界では、「スプスタンティア」と「エッセンティア（本質）」は同じ意味でとられていたようで、もし神の三つの位格ということ「三つのスプスタンティア」というなら、それは「神の三つの本質」という意味になりかねない。神の本質は一つですから、三つということはない。だからこの「スプスタンティア」という言葉は使うわけにはいかないということでした。

もう一つ、ギリシヤ語で「ヒュポスタシス」の代わりに使用可能であったものに「プロソープン」とい

う言葉があります。「仮面」とか「顔」という意味です。それをラテン語に翻訳すると「ペルソナ」となります。しかしこの言葉は異端的な人々（ネストリオス系）が使っていたので、ギリシア語世界では第一番目の用法としてあまり使用されなくなってきました（もちろんまったく使わないという意味ではありません）。一方、ローマの方の人は「スプスタンティア」は使わない。それで「プロソポン」の対応語である「ペルソナ」を使うということになってきました。使用語のねじれ現象が生じたのです。「ヒュポスタシス」をもっぱら使用し、ある面では「プロソポン」も使う考え方と、「プロソポーン・ペルソナ」しか用いないというメンタリティは相互に違いが出てくるのです。

こういうことからおわかりのように、ヨーロッパの西と東は言語の問題だけではなくいろいろな齟齬が生じてきていたのです。

その次に問題になったのが「フィリオクエ」です。「フィリオクエEtiologie」というのは、「フィリウス」という言葉から来ており、これは「子」ということですが、

この場合の「子」は「神の子・キリスト」のことです。「クエ」は接続詞で「〇〇と」という意味で、「AとB」という場合に「B」の方につきます。ここで「フィリオ」は「子から」という意味です。

さて「フィリオクエ」とはどういうことかと言いますと、公会議で決定した信仰簡条（キリスト教徒が信ずべき事柄の要約）の中に先ほどの神の位格である「父と子と聖霊」の関係を示す文言があります。言葉通り父が優位に立って、子は父から生まれると言います。では聖霊に関してはどうか、これは非常に難しい問題でした。聖霊と父、そして子との関係が。色々の議論の末、「聖霊は父から発出する」ということになりました。「生まれる」ではなく「発出する」ということです。子どもは生まれますが、聖霊は出て行く。そういう形で教会の信仰簡条の一つが決められたのです。

最初から聖霊の位置づけともいえるべきものは様々な見解があったようですが、西側の教会を取り巻く環境は東側と違っていて、ゲルマン系のフランク人の勢力などが背景にありました。ただゲルマンだけではなく、

イベリア半島の人も含めて、聖霊は父から発出するのではなく、父と子から（フィリオクエ）発出すると考え、これを先ほどの信仰箇条の文言に付け加えたのです。つまり「聖霊は父からだけでなく子からも発出しますよ」ということです。これを聞いたコンスタンティノポリスの総主教はローマ教皇（ローマの総主教のこと）に、「おたくのほうではこういう言い方をしているらしいけれども、公会議で決めたことは絶対に削除附加をすることができないとエフェソス公会議で決まっている。削除附加等は公会議の決議事項違反であるから、そう唱えないように」と注文を付けた。それで、ローマ教皇も、「それはそうだ」ということで、ガリアだとか、イベリア半島、そしてフランクの教会に「そのような条文を挿入しないように」と言い渡したのです。しかし西側の人々は、これをどうしても条文に入れるようローマ教皇のほうに詰め寄ったわけです。違反であることはローマ教皇は承知していて、初めはそれを唱えることを禁止していたけれども、色々な政治的なことがありまして、黙認し、それからだんだん唱えら

れるようになり、やがてそれが既成事実になった。コンスタンティノポリスの教会は「これはいけない」とずっと批判したわけです。ほぼ、これがフィリオクエ問題です。

この問題はなかなか解決策が見つからず、その他の問題もあって、1054年に東西教会は分裂してしまいました。そのあたりを境にして、東の教会と西の教会は様々なことでしょくりいなくなってしまい、その結果、現在に至るまで両教会は完全には融和していないわけです。実は私が興味を持ったのはこの東の教会なのです。

分裂の結果

ただこれで両教会の関係はすべて絶たれたというのではなくて、たびたびローマ教会から教会合同の働きかけがありました。有名なのが、フェツラー・フィレンツェ公会議（1438・39）ですが、その前に第2リヨン公会議（1274）があったりします。地域によっては、「では、カトリック教会と一致しましょう」と



言って合同した教会がありますが、ロシアとか、コンスタンティノポリスの教会は合同しませんでした。実は、先のフィレンツェ公会議で一応は合同ということにはなったのですが、それは破棄されました。こういうことがあって、後々まで問題が尾を引くわけです。以上が大雑把に東西教会のかかりということです。

教父たち

西も東もその両教会には「教父」と言われる人たちがいます。この人たちは、キリスト教会の教義や考え方を確立していくときに非常に功績のあった人たちのことを言います。誰を教父と言うかという基準みたいなのがありません。時代的に古代世界に属し、10世紀

アトス山（標高2033m、7頁に地図）は、東方正教会の聖地で「聖山」と呼ばれる。ギリシアに属するが、各国正教会の20もの修道院・修道小屋による自治が認められている（アトス自治修道土共和国）。グレゴリオス・バラマスも、ここで修行した。ユネスコの世界遺産。写真で、山の中腹に建つのはシモノペトラ修道院。海面まで330mある（2012年5月撮影：from Wikimedia Commons）

ぐらいまでの人で、そして聖人であり、また教会の正統な教えを確立した、そういうふうなことが一応の基準ですが、必ずしもその基準に合わない人も入っています。

その中で、主にギリシア語で著作をした人を「ギリシア教父」と言い、他方、ラテン語で書いた人のことを「ラテン教父」と言っています。西の教会でもそうなのですが、東の方の教会にとつては、特に教会の考え方の根本的なものの礎を据えた人ということで、教父の地位は相当に高いです。

ところで「ギリシア教父」の中で非常に有名で、優れた教父にアレクサンドリアのオリゲネス（185頃・254頃）という人がいますが、実は彼の考え方の中にはキリスト教の正統的な考え方とそぐわないものがあるということ、彼自身は断罪されました。オリゲネスはプラトンの思考に非常に親しんでそれを取り入れた。例えば、魂の先在説とか。もちろんオリゲネスが徹底的にそう考えていたかは、にわかには決められません。また悪魔も救われるといった考えが見られま

す。これなどキリスト教では、救済というのは当然が本心に心から悔い改めて、神に立ち返る者になされると考え、それ以上に悪魔は人間と違ってその知性は高いものですから（もとは天使であったが、神に背いたので悪天使、悪魔になったとされる）、一度神に背けばそれは未来永劫その状態は変わらないとされるので、非キリスト教的思考とされたものです。ただし人間の場合はありがたいことに体を持っているため、考えが鈍く、真理を容易に把握できないところがある。だから人生の最終段階で改心すれば救われる。だが天使はそうはいかない。天使というのは精神そのものですから。しかしオリゲネスは「いや、天使も救われる」というようなことを言った。

そんなようなことがあって、オリゲネスは完全な意味で教会が認めた聖人とは言えない。しかし、オリゲネスは、当時の世界としては非常に斬新な「聖書学」を切り拓いたのです。聖書の注解をしたわけですが、オリゲネスは非常にたくさんの注解をしています。残っているものと残っていないものがあり、ギリシア語

で書いているのにギリシア語のものがなくてラテン語訳だけ残っているということがありますが、彼は独特の方法で聖書の色々な文言を注解しました。

今の聖書学というのは昔とは随分違いますが、それでもオリゲネスのやったことの中で現在の科学的な手法に近いものは、「六欄組聖書」と言って、当時旧約聖書（ヘブライ語聖書）のギリシア語訳は有名な「七十人訳」以外に何通りかありました。それを、「A訳はこう、B訳はこう、C訳はこう」というふうに六つ並べて一覧できるように仕方で組み直した。こうして聖書解釈の獨創性と研究上の手法が優れているので、彼は教父の一人に数えられているわけです。あとクレメンス（140/150・211/215）とかもいますが、この人たちは教会にとって大事な人だということで、聖人ではないけれども教父に数え入れられているわけです。

神認識の問題——否定の契機

次に神をどう人間は認識するのかという問題です。東方の人たちは神を認識するという問題について、ど

ちらかという「否定」を介して認識するという方向をとります。一般に神をどう捉えるかという神学的手法を「肯定神学」とか「否定神学」という言葉で表します。肯定というのはたとえば「神は愛である」とか、「神は全能である」というような、いわゆる肯定文で表現するものです。これに対し否定というのは、「神は○△ではないし、△△でもない」と言って否定を繰り返すものです。

東方キリストでは、神を人間はどんなに逆立ちしても掴めない、把握できないと考えます。天使であっても神が「何であるか」は把握できない、これが鉄則としてあるわけです。しかし、われわれは神と何らかの関わりを持つ、神はわれわれに恵みを与えるということから、そこに何か神を知るといふきっかけのようなものがあって、その限りで神を認識することはできるだろうと考えるわけです。

これはどちらかと言えばという話ですが、西側の教会は、「神は○△である」という肯定的な言い方を好むとされます。もちろん、否定的言辭も使いますが、ど

ちらかと言えはそういう傾向が強いのです。ところが、東の方の教会はその立ち位置としては否定というものを介して神を知ろうということを強調するわけですが、一般的に、それぞれを「肯定神学」「否定神学」と言っています。

この「否定」はある意味表現を拒否するわけですが、こうして否定を繰り返せばどうなるかというと、結果的には何もわからないということに至ります。では何のために否定を繰り返すのか。そうしても結局何もわからないのだしたら、逆に「神は愛である」とか、「神は恵み深い」とか言う方が得るものが多いのではないかと。神はそうでもない、ああでもないと言うだけだったら、かえって知的欲求不満が残るだけではないか、ということになります。

では否定を重ねるといえるのはどういうことでしょうか。普通の状況では、神を信じている人は「これが神なのだ」と思っています、われわれが幾ら「これが神だ」「あれが神だ」と言っても、本当の神は掴んでいないのです。それどころかもっと悪いことに、われわ

れは神ではないものを神と考えている場合が多いのです。たとえば「お客様は神様です」とか、「名誉は神です」とか、あるいは「財宝が神です」とか。私たちはそんな言葉は使わないかもしれませんが、実は各人は神の位置にそうしたものを置いている。それは無明、迷いみたいなものにわれわれが左右されているからです。これが神だと仮に確信しても、独りよがりの神かもしれない、都合のよい神かもしれません。われわれは本当の神にはなかなか向かえないのです。むしろ勝手な神観念を造ってしまいかねない自分を糺さなければならぬ。否定神学の「否定」というのには、そういう意味があるのです。だから否定神学の営みとは、自己否定だとも言われています。自分が、安易に「これはこうなんだ」と思ってしまうところを否定していくという作業です。

本当に、実際のところ神というのはわからないし、「わかった」と言ったら、傲慢の誹りを免れないでしょう。われわれの傾向は、神ならざる者を神と置いてしまうことが強く、それを戒める気持ちもあって、神認

識に関しては否定の契機を持ち込むのでしよう。その点が、東方教会神学の一つの特質です。西方教会などではエックハルトなんかが割合積極的に否定神学の方法を取り入れました。その意味で、西方教会でも否定神学は語られますが、それはいわば傍流で、西方はむしろ正攻法でいきたいということです。

修道制

それから、東方教会は修道制と深く結びついている点が特徴的です。修道生活というのは紀元のかなり早い時期、2世紀ぐらいに始まっているらしい。特に、最初期エジプトの砂漠でそれが行われたということになっています。修道者としてよく知られた人はアントニオス(251頃・356)と言う人です。この人は独居して、砂漠や荒野など寂しいところとか、洞窟とか、打ち捨てられた家だとか、そういうところに籠ってひたすら祈りの生活をしていました(隠修制)。彼を慕って多くの人が集まったようですが、彼がやったのは一人きりで、非常に厳しい修行をしたので、たとえ修道

生活を送りたいと思っても、彼のように厳しい生活は送れない人が多いので、共同生活を営みながら、修道生活をしようということになりました。パコミオス(290頃・346)という人が共住制を実践しようです。ただ、どうして修道制が成立したのかについては色々の研究がありますが、決定的にこれが理由だというのはわからないようです。結局は様々な要因があつて、成立したのでしよう。しかし、キリスト教成立のかなり早い時期からある種の人々は砂漠とか、荒野とか、そういうところに行つて、町の中の生活ではない孤独な生活を選びました。まずエジプトの砂漠に起こつて、それが順次色々なところに広がつていきました。そうした中で、やがて修道生活を組織化していくという動きがあつて、エジプトの修道生活などを参考にして、カッパドキアの三神父の一人であるバシレイオス(330頃・79)が修道規則などを定め、修道生活の基本を築いていったわけです。

東方世界で非常に盛んに修道院が造られていったのを西方の人が見聞きして、それに関心をもったのが「ヌ

ルシアの)「ベネディクトゥス(480頃・547/550)です。彼が東方の修道制を模範にして、そして西側の気候とか、メンタリティーとか、そういうのに合わせて共同生活の様式を定め、修道制を形成しました。これが、いわゆる西方教会の修道会「ベネディクト会」の始まりと言われています。この修道制がだんだん西側世界に広がっていくわけですが、東方世界では修道制がキリスト教を担う土台だと考えられているのです。

正教会はカトリック教会のようにローマのヴァティカンを中心にした教会というよりはそれぞれの国ごとに、たとえばロシア正教会とかルーマニア正教会というふうに自立しています。そのため、教会の精神を担う柱として修道院が存在する必要があるのです、それがないと自立した教会とは認められないというところがあります。日本の場合、正教会は東京や東北や名古屋や九州にあります。現在信徒数はそんなに多くありませんが、ロシアの正教が入ってきて、日本の正教会の礎が築かれました。しかし厳密な意味での修道院は現在ありません。正教会では在俗の司祭は妻帯が認め

られています。修道者は独身です。そして教区の責任者である主教は修道者から選ぶということになっているので、主教は独身です。日本では特殊な事情で、主教のいるところは独身者のいるところになりますから、修道生活をしていることになりませんが、独身の主教の他に修道者がいるわけではないのです。従って厳密な意味において日本には修道院がないということである国の正教会は日本が独立した正教会の教会であると認めないというようなことがあるようです。これに対してカトリックの司祭は独身で、司教ももちろん独身です。これは11世紀ごろに決定されたのです。それまでは司祭で結婚している人も大勢いたわけです。とにかく修道院は教会を霊的に養っていく栄養みたいなものです、それが一番大事だと考えられている。これが、東方教会の性格の特徴です。

教会の知的な営為

最初東方教会はキリスト教世界において先進地域にあったというか、西側の教会よりも知的な方面におい

てリードしていた面があります。もちろん西方にも4世紀にアウグスティヌス(354・430)という人が出て(アウグスティヌスはアフリカの出身でヒッポの主教)、相当高水準の段階まで神学を作り上げ、それ以後非常に大きな影響を西側教会に与えます。

後にゲルマン系のフランク王国が興隆し、やがて安泰化してキリスト教が広まっていったりしているうちに、西側の教会ではアンセルムス(1033・1109)という人が出ました。イタリアのアオスタ出身で、後に彼はイギリスに行つてカンタベリーの大司教になつた。その前には、フランスのベックという修道院で勉強します。この人が、弟子に頼まれたからと言つていますが、「神は存在するかどうか」という問題を取り上げ、それを論証することを試みます。キリスト教の世界での試みですから、当然、神は存在するに決まっているわけです。そこで「存在しない」と言つたら自己矛盾を犯しているわけです。しかし基本的には信仰に裏打ちされているながら、「神が存在するかどうか」ということを一遍考えてみる値打ちはあつて、その証明が

できれば、一般的に応用できるということです。そうするとそれは一種の科学的証明が出来上がるかもしれない。

実は東のほうの世界でもダマスコスのヨアンネス(675頃・749頃)という人がいて、非常に包括的な神学の書物を著して、西方教会のスコラ学にも大きな影響を与えました。この書物の中で神の存在を問題にしていますが、彼の場合は、例えば、デカルトのように方法的懐疑で、一遍疑つてやつてみようというのではなくて、「神は存在する」ということをあくまで信仰の立場から説明しようとしている。ところが、このアンセルムスの場合は、世の中には神の存在を信じない連中もいる。その連中は「神なんかいない」と愚かなことを言っている。でも、そんな愚かしい連中にもわからせる方法はないかと考えるわけです。それで、「神とこの世の間にはこれ以上大きなものは考えられないもの」を指すのだということから論証を始めていくのです。

その有名な論証は論証として揺るぎないものかどうかは別として、こういう仕方、一旦信仰の立場は置

いておいて、いわば白紙の状態で、神の存在を考えてみようというやり方はこれまでと比べて、非常に大きな変化です。つまり、神を信じているわけだけれど、愚かしい者の地平に立って、一遍そこを疑ってみた上で、論証によって存在することが確かめられたならば、信仰者としては余計に信仰が強まるし、信じない者をも説得できる。それでそういう歩みを踏み出した。東の方ではそういうやり方ではなく、一応は問題にするけれども、あくまで信仰というものの基本に置いてやっている。ところが、一遍信仰の立場を、たとえ方法的にでも覆っておいて、何もないところから出発してみようというふうにやった西の方法は東との大きな違いだと思えます。

それ以降、論理学の分野でアベラール（1072・1142）とか色々な学者が出てきて非常に細かい議論の進め方をしていったのです。12世紀ぐらいにアリストテレスの哲学がアラビア経由で入ってくるのですが、これも西欧にとつては非常に大きな変化でした。

アリストテレスの哲学は、それまで西側の人々がほと

んど知らなかったものです。アリストテレスの哲学はプラトンと違い、プラトンのいわゆるイデアをものに内在させるような傾向をもっており、イデア界というようなこの世界を離れたところに根拠を置くのではなく、現実の世界を見据えた上での議論の進め方をします。また論理学や形而上学というものがキリスト教の思想を表現するのにも有効と考えられたところがあって、アリストテレスの哲学を研究する人が現れ、その結果、スコラ学（スコラ哲学）というのが生まれていったわけです。学問であつても、信仰が前提になつていきますが、可能なかぎり神と人間にまつわる様々な問題を合理的に解こうとしたのです。こうした困難な問題を看板に乗せてやりますので、一種の解剖学ですね。こういう素地の上に非常に体系的な神学が編まれていったわけで、13世紀がその頂点です。

グレゴリオス・パラマスの登場

西側はそういう状況でしたが、では東側はどうかというと、東側でもある人々は神と人間にまつわる問題

を、プラトンの哲学に基づいたり、あるいはアリストテレスの哲学に基づいたりして、哲学的な基盤をもっと深めたいという願望をもちました。

しかし東方、つまりビザンティン世界は哲学的に神にまつわることを探求するよりは信仰の教えに準ずる傾向が強かった。ですから、学者の中で、極端なプラトニストは「異端」というレッテルを貼られてしまうのでおちで、哲学的アプローチはなかなか成就しなかったのです。こうして、13世紀ぐらいになると学問の上で東西に大きな差が出てきたわけです。そこに、私が1980年代ぐらいから勉強してきましたグレゴリオス・パラマス（1296頃・1359）が登場してくるのです。パラマスは、お父さんがアンドロニコス2世という皇帝に仕えていたので、子どもときには宮廷で育ったようです。ビザンティンの教育は西側と違って、大学というのはあまり大きな力をもちませんでした。私塾が主で、大学は官吏養成の帝国大学ぐらいです。それに対し、西側はご承知のようにパリとか、ケルンとか、オックスフォードとか、ボローニヤとかの

大学が生まれ、医学部、神学部、法学部の三つの学部が形成され、それ以後の知的世界を形成する核になってゆきます。

ビザンティン世界は西欧のように、何ごととも組織立ててゆくという性格があまりないようです。パラマスも大学ではなく、宮廷で教育を受けている。研究者によると、パラマスはアリストテレスを勉強したと言われています。ビザンティンでは、どちらかというのアリストテレスは勉強してもいいが、プラトンはあまり勧められませんでした。つまりプラトンは、靈魂の先在説であるとか、一種の輪廻転生みたいなことを説いていて、キリスト教的見地から警戒されています。そこに行くと、アリストテレスは「世界の初めはない」とか言ったりするので、その限りでは、キリスト教に抵触するけれども、論理学だとか、形而上学だとかは非常に有用だということになっていたようです。ところが、お父さんが早く亡くなりましたので、長男であったパラマスは残務処理をやって、お母さん、妹、弟たちを連れて修道院に入った。パラマスは男性ですか

ら、弟たちを連れてアトス山に行ったわけです。テッサロニキというギリシアの北の大きな町の近くに、半島があって、その一つにアトス山という山があります。昔、聖母マリアから、「ここに修道院を造りなさい」と告げられて造ったらしく、大勢の修道者がここにやって来て、修道院を造りました。半島ですので、地続きですが、現在ここに行こうと思えば船に乗って行かなければいけないし、女人禁制で女性は入れない。また牝の家畜は繁殖し、それが増えると財産になりますので（無所有）、牝の家畜もだめだということになります。

パラマスはここで修行するわけです。弟たちはそんなに長く続かなかつたのかもしれませんが、パラマスはここで修行した後、最終的にはテッサロニキの府主教になりました。実は、これだけの話なら、パラマスという人はあまり知られなかったかもしれません。

ところで、パラマスはアトス山でヘシカズム (Hesychasm) という靈性を極めたと言われています。ヘシカズムというのは「ヘーシユキア」という言葉から来ている

ようです。ヘーシユキアというギリシア語は「静かである」とか、「落ち着いている」とか、「平穩である」という言葉だそうです。語源の厳密な意味はよくわからないのだそうです。修行者は短い祈りの言葉を絶えず唱えるという形の行をするわけです。どうしてこういう形の修行が生まれたかも不明なところが多くあります。しかし砂漠の修行者・アントニオスなどの時代からこのような祈りの方法があったのだと言われています。今ではアトス山は時間ごとに修道者が日に数回共同で祈りを捧げます。夕べの祈りとか、就寝前の祈り、夜半の祈り、早朝のものとか七つぐらいに分かれていて、断食期間に断食し、共同生活をするわけです。

もう一つの生活形態があつて、それは、一人で孤独のうちに修行するやり方です。アトスの写真を見ると断崖絶壁のところに小屋があつて、そこで一人で暮らしている修道者がいるのがわかります。その人は土曜日になるとその小屋を出て、自分の属している修道院に帰ります。日曜日には大きな典礼があるので、それに参加して、再び自分の小屋に帰る。先ほど言いまし

たように、アトスで修行している人は短い祈りを唱えます。これは「心の祈り」であるとか、「イエスの祈り」と言われます。要するに、短くていいが、同じ文句の祈りを何回も繰り返すのです。だから、「イエス」「イエス」「イエス」でもいいし、「神の子」「神の子」「神の子」でもいいけれども、だんだん定式化して、「主イエスキリスト、神の子、「罪びとなる」我を憐れみたまえ」というふうな言葉になりましたが、それを何回も繰り返すのです。これを熱心に行っていると、そのうちいろいろな雑念が遠のいて、最終的には神と一致できるというのです。私などは何度やってみても雑念ばかりで、その実践は本当は大変難しいものです。

そのときに使うものに、数珠のようなものがあったて、コンボスキニオンとかロシアではチヨトキとか言っています。一つひとつの結び目で先ほどの「イエスの祈り」を唱えます。これは百結び目があって、ひと回りすると百回イエスの祈りを唱えたことになる。これを何千回とか一万回とかやるわけです。その果てに神と一致できるというわけです。修道者はこれをベルト

コンボスキニオン。
正教会の祈りで使う。
紐で作られたものが多い



につけて歩いたりしています。常住坐臥、祈るわけです。これがそれです。「コンボスキニオンを見せる」

東方教会の典礼

ここでパラマスのお話を少し中断して、お疲れでもありましょうから、CDなどを聞いて、少し東方教会の典礼に触れてみたいと思います。

まず聞いていただくのは次のCDです。[Die Göttliche Liturgie des Heiligen Vaters Johannes Chrysostomus, byzantinisch - slawischen Ritus der Ukrainer (東方教会のヨハネ・クリソストモ典礼)ウクライナのビザンツ

Ⅱスラヴ式ミサ・ドイツ、ハルモニア・ムンデイ）」

カトリック教会や東方正教会での中心的な祈りというものは、ミサとか聖体礼儀と言います。今聞いていただいたのは東方正教会の聖体礼儀の一部です。これは特にビザンティン様式の典礼で、クリソストモス典礼と言われています。教会の始めの頃は典礼は一応同じようなものでしたが、各地方で独特の典礼のやり方が行われていたようです。この典礼は大きく分けて今の西方カトリック教会が行っている典礼と東方の諸教会が行っているいわゆる東方典礼の二つになります。西方教会においても様々な典礼様式がありました。次にローマ式に統一されてきました。東方は各地域でやや異なりますが、カトリックのミサも、この正教会の聖体礼儀も、基本的には一緒に、流れとしては最終的に聖体を拝領するところに行きつきます。聖体というのはキリストの最後の晩餐を記念し、キリストの体と血がパンと葡萄酒に聖変化したということを通じて、信徒はそれをいただくところがクライマックスです。そこに至るまでに「言葉の祭儀」（使徒書簡や福音書の朗

読）等様々なものがあり、説教があり、信徒が信すべきものとしての「使徒信条」を全員で唱えたりとかして（ミサと東方典礼ではこれが唱えられる典礼中の位置が異なりますが）、聖体拝領の準備をし、最終的にそれを受けて、あと散会する。そういう流れです。

ビザンティン式の東方典礼では、大きくクリソストモス典礼とバシレイオス典礼、そして先備聖体礼儀に分かれます。これには司祭・輔祭（カトリック教会では助祭という）そして信徒、そして聖歌隊が必要です。典礼は基本的に歌われ、西方教会のようにオルガン伴奏というのではなく、アカペラです。司祭の言葉に輔祭が応じ、それにさらに聖歌隊が応じて、掛け合いのようになっていきます。ここでは初めに輔祭が「君や、祝賛せよ（CDではスラヴ語で、ブラゴスロヴィ・ヴラディコ）」と呼びかけると、祭壇の方から司祭が「父と子と聖神（東方教会では聖霊のことをこう言う）の国は崇めほめらる。今も何時も世々に」と答えるわけです。そして聖歌隊が「アミン（西方教会でいうアーメン）」と和します。そして輔祭が先導して、一連の祈り、つまり連禱が始まるの

です。連禱というのは、例えば、世界の平和を求めたり、ここに集まっている人や病人を憐れんでくださいとか、国の為政者に恵みを与えてくださいとか、あるいは、旅行している人や、労苦している人を助けてくださいという願いをささげるものです。その一つ一つの願いの後に、聖歌隊が、「主、憐れめよ(ゴスポディ・ポミルイ、キリエ・エレイソン)」と言う。これもまた掛け合いです。このように聖体礼儀の中で何度も連禱が繰り返されます。この連禱にも種類があり、非常に長い重連禱、大連禱、小連禱と分かれます。連禱が聖体礼儀の基本なのでしよう。

ところでカトリック教会とプロテスタント教会は、この日曜日(2015年4月5日)が復活祭でした。日本の正教会は、この次の日曜日が復活祭です。キリスト教の初期、復活祭というのとはもともユダヤ人たちの過ぎ越し祭である「ニサンの月の14日」に祝うところと「ニサンの月の14日の直後の主日」に祝うところに分かれています。この日取りを巡って論争が起こったのです。ユダヤ的な環境に近いところとそうでない

ところでは考え方が違ってきます。それで、第1ニカイア公会議で、春分の日の後の満月の次の最初の日曜日と定められたのです。今年は4月4日土曜日が満月だった。だから、翌日の日曜日が復活祭です。ところが、正教会はなぜ次の日曜日かと言いますと、使用している暦の違いによります。カトリック教会、プロテスタント教会はグレゴリウス暦を使っています。東方正教会ではユリウス暦を使っています。ユリウス暦も古代では正確な暦でしたが、だんだん実際の太陽年とのズレが生じてきます。それで西方教会では16世紀にユリウス暦からグレゴリウス暦に変えたのです。このためグレゴリウス暦とユリウス暦に日付の違いが生じてきます。しかし正教会はユリウス暦を採用しているので、他の教会の復活祭と違いが生じてくるのです。そのため2週間ぐらいの差がある場合と、今回のように1週間とか、あるいはまったく同じ日になるときもあります。たとえば有名なアトス山ではまず入山許可証をもらいます。そこに記されている日付は、仮に今日だと、4月9日なのに、アトスでは4月1日ということにな

ります。だから、その年によって復活祭を祝う日が違うのです。

では次は復活祭の典礼を聞いてみましょう。(Divine

Liturgie Orthodoxe au Monastère de la Trinité Saint -

Serge à Zagorsk. LDC 278 691 CM 2011)

復活祭の典礼は土曜の夜から始まって明け方ぐらいまで続きます。復活祭の朝課から始まり、真つ暗な教会の周りを歩きめぐり、いよいよキリストの復活を告げる場面となります。「ハリストス(キリスト)死より復活し、死をもって死を滅ぼし、墓にある者に生命を賜へり」と聖歌隊が歌い出します。さらに「ハリストス復活」と輔祭が言うと、信徒は「じつに復活」と唱和するわけです。このCDはロシアで録音されたもので、教会スラヴ語が使われています。こういうことが行われて、教会に集まる人々が手にする蠟燭に火が付けられる。鐘の音も聞こえました。たくさんの大小の鐘があるのですが、その鐘に結び付いている紐を修道者が足と手を使って巧みに操って、鳴らします。また禅寺にあるような板(シマンドロン)を木槌でトントン叩く

ようにして、相撲の触れ太鼓のように音を出します。少し東洋的だと思いますが、そういうやり方でキリストの復活を宣言するということですね。この式は一晚かかるので、かなりつらいところがあります、しかしそうして身体も精神もともにキリストの復活を喜び祝うのです。

もう1枚CDを聞きます。[Arabic/Byzantine-Easter Sunday Liturgy]

これはギリシア語です。先ほどと同じように、キリストが死から蘇ったと歌いますが、途中でアラビア語が入ってきます。アラブ系の東方キリスト教の信徒はビザンティン典礼を使うグループもあるのです。ただアラブ風なので、先ほどのものとメロディも少し違います。

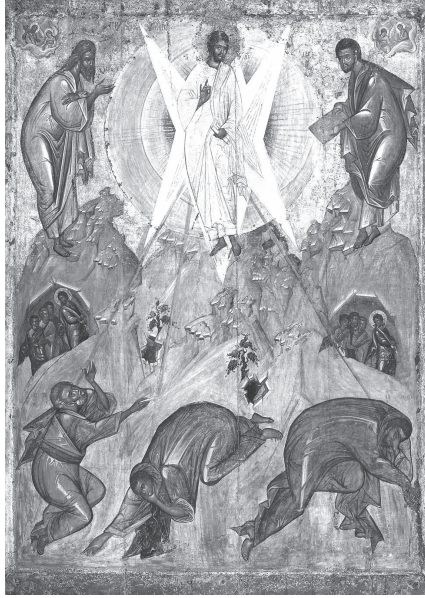
ヘシカズム論争

今、CDを聞きました。ではもう一度話を戻して、ヘシカズム論争に移ります。パラマスがアトス山で修行し、その後テッサロニキで司牧をしている頃、バル

ラム（1290頃・1348）という人がイタリア南部からやって来ます。バルラムはギリシア系だと言われていますが、もともとは南イタリアのカラブリアの出身です。修道者ですが、司祭になるための最終的な教育を受けるためコンスタンティノポリスにやってきたようです。この人は色々な興味を持つ人で、コンスタンティノポリスでアトスからやってきた修道者と話をしたらしいのです。するとアトスの修道者は「イエスの祈り」をやっていて、この祈りの状況が高じると神を見るのだと言うので、「何事か？」と聞いて聞き出すと、人間が神を見るなど変なことを言っている、と思いました。人間は神を見られるわけがないのに。そこで彼は幾つかのデータを集めたのでしょうか、最終的にこれは異端だと判断したのです。昔、メッサリアノイという異端があったけれど、それに似ていると言って、ビザンティン教会に告発しました。メッサリアノイというのは祈りを中心にした修行をし、この祈りを徹底させると教会も秘跡も必要ではなく、人間が直接神と交わるのだと主張したのです。

この告発を自身アトスで修行し、テッサロニキの府主教であったパラマスが受けて立ったことから、いわゆる「ヘシカズム論争」が起こってきたわけです。パラマスは、自分の同胞の兄弟たちが非難されていることを捨て置くわけにはいかないとということで論争をしたわけです。しかしこの論争の中身というのはなかなか複雑です。バルラムという人の書いたものを見ると、確かにバルラムはイタリアにいたので、西側の知的状況にも馴染んでいたようです。イタリアはやがてルネッサンスを迎えることになりましたが、そのときはまだまだ準備期のようなもので、それでも東方世界とはだいぶ雰囲気違っていました。バルラム自身学問をよくし、その知的興味は天文学や論理学、あるいは当時の科学にまで向けられ、また修道者である以上、神学に長じた学者でした。こういう人ですから、論法としては筋が通り、人をして「なるほど」と思わせることが多いのです。一方のパラマスはというと、先ほどアリストテレスの教育を受けたと言いましたが、アリストテレスの論理学等を知ってはいるのでしよう

が、その議論を詳しく調べていくと、ちよつと飛躍しているのではないかとこのころがあるわけです。パ



フェオファン・グレク作「主の顕栄（主の変容）」（1408年頃。トレチャコフ美術館所蔵）。イエスが3人の使徒（ペトロ、ヨハネ、ヤコブ）を連れて山に登り、預言者モーセ、エリヤと語り合いながら、白く光り輝く姿を示したという福音書の記述に基づく。東方教会では、この山をイスラエル北部・ガリラヤ湖近くのタボル山（7頁に地図）として「タボル山上での主の変容」と呼ぶ。この時の光をパラマスは、神の本質（ウーシア）でこそないが、キリストの神性を示すものであり、神のエネルゲイア（働き）の顕れであるとした

ラマスは司牧者でしたし、靈的修行者ですが、バルラムは学者肌の人でした。ですから彼はコンスタンティノポリスでは擬ディオニシオス・アレオパギテースの講義などをしていたのです。そういう学者からディオニシオスのことを聞こうと、たくさんの聴講者が詰めかけました。人気が出てきて、皇帝も、「なかなかの人だ」と思ったのです。

当時、西方教会と東方教会は大変な問題を抱えていました。東側の教会はイスラーム、特にオスマン・トルコと相対峙していました。トルコは虎視眈々とビザンティンを狙っていたわけです。昔は十字軍というのがあって西側からたくさんの兵隊が行きましたが、もう十字軍が終わっている時代です。ビザンティン帝国は千年ぐらいい続けているので、国力や色々なものが疲弊しています。そうすると、ビザンティンは西側から援助を頼みたいけれども、ただでは誰もやってくれないので何か取引が必要です。すでに言いましたように長年来、東西教会は分離しています。援軍を西側に頼むと、「では、ビザンティン教会もローマ教会の傘下に

入りますか」というのを多分カードとして出してくる。西側の切り札はそうです。しかしそれを受けることは大きな問題です。ビザンティンの方としては、それは沽券に関わるとか、そんなことはできないというのがあるし、特に修道者にその気持ち強い。修道者はローマ教会を悪魔の教会みたいにしていて、そのローマ教会と一緒にいるというのは自殺行為だと思っているので、なかなか「うん」と言わない。しかし、皇帝や国の高官にしてみれば、そんなことを言っていると国が滅びるということですよ。

それでこの問題を解決するため、西側に詳しいバルラムをビザンティン皇帝はカトリック教会に送って、ビザンティン教会の立場を説明させた。秘密裏に特使として。当時、教皇庁はローマではなく、フランスのアヴィニオンにあつたので、彼はそこへ行ったのです。他方、パラマスはコンスタンティノポリスで非常に高い人気を得たイタリアから来ている修道者がいると聞いていた。しかし、彼はイタリアから来たということとどうも胡散臭い人なのではないかと思った。嫉妬

もあつたかもしれません。外から来て、そんな人気を得るなど我慢できないということがあつたかもしれませんが、どうもイタリアから来ているというのは純粹に正教会の人ではないのか、という疑いもあつたのです。それで、当時の弟子にアキンデュノスという人がいて、ブルガリア出身と言われていますが、このアキンデュノスが丁度コンスタンティノポリスにいたので、バルラムの書いたもののコピーを送ってくれと頼んだのです。それでその論文を見て、どうもパラマスはバルラムがローマ教会側ではないかと邪推を交えながらも思つたらしいのです。そうしていると、告発され、ならばこれを受けて立たなければいけないというので論戦をすることになったわけです。当時の論戦というのは、両者が出かけて行って討論するのではなく、手紙のやり取りで行われました。私も最初、この論争の文書を読み始めたときに、何でこんなことを言うのかと思いました。というのは議論の半分ぐらいは相手を罵倒しているのです。「お前は間違っている。こんなことを言うのは、どうかしている」とか、

「お前は〇〇の手先だ」とか、「狂っている」みたいな感じのことを言うのです。私だけがそう感じるのかと思っただけで、ある西洋の学者の論文を読んでみたら、こういうやり方なので、この議論はとっつきにくいと書いてありました。私だけではなかったのです。現在では誰でも少し変だと思いますが、当時はそのように相手をやっつけるのが普通のようにでした。しかし文章の初めの方には「尊敬措くあたわざる〇〇様」と書いてあるのです。また、こともあるように、弟子だったアキランダエノスがバルラアムについてしまった。それでパラマスも落胆してしまいますが、議論を続けるのです。そのときにパラマスは、「神を見る」と言ったことについて、こういう説明をしました。東方教会の伝統で、神は何か（本質）ということ、それはつかめない、人間には理解できない、絶対にわからない、と主張されます。しかし、それだと神とわれわれは何の関係もなくなくなります。しかし神はわれわれに恵みを与えるし、神とわれわれは折りで交わりがある。もし、神が全くわからないものであれば、人間はもう取り付く島もない。そ

うではないのだ。それを彼は、「われわれがわからないというのは神の何であるか。（本質・ウーシア）である。つまり、神の本質は捉えられない。しかし、神はわれわれに何らかの働きを及ぼしているのです、その神の（働き・エネルギー）をわれわれは把握することができないのだ」と。このように、神のうちに本質と働きの區別をしたのです。

ところが神のうちに本質と働きを区別するという考えは大きな問題になりました。もちろん、バルラアムは承服しないし、後の時代のカトリックの学者も承服しない。つまり、そうなると神に「本質」と「働き」という二つのものがあることになる。神学では「神は完全で、合成されず、単純だ」と言っているのに、それでは本質と働きの合成物に神はなってしまうということでは反対したわけです。

神と人間の関係に関して、神の本質は被造物には理解できない、しかし神と人間は何らかの関係をもちますから、全くわからないものとは関係のもちようがないのです。だから、パラマスが言わんとすることはわ

かるけれども、この発言の仕方に論理的な押さえどころが十分ではないのだという意見もあります。またパラマスの言い方はちょっと特異かもしれないが、古来の教父も似たようなことは言っているから、かならずしもパラマスの独創ではないという考えもあります。そういうわけで、論争に次ぐ論争が生まれました。パラマスがバルラアムを批判するのは、「バルラアムはアリストテレスに拠って、人間の認識は感覚から来る、そして感覚の認識が知性により抽象化されて、ものごとを知るようになる」としている。ところが、神を見るという事態は、そもそも神は見えるはずはないから、感覚は働かないので、神の認識には至らない。だから、神はつかめないとしている」ということで、そういう態度をパラマスは「不可知論的だ」と言うわけです。バルラアムは神を知るといのは、信仰によると言います。信仰がなければ神がわかるはずがない。ところが、パラマスは、もし信仰ある者だけが神を知るのなら、つまり神の啓示を受けた者だけがわかると言うなら、それが受けられなかった者はどうなるのか。そ

の場合、そういう人に神の話をして無駄になる、と考えます。そうではなく、神はすべての人に開かれた存在なのだから、たとえそのような啓示を受けていなくても、あるいは信仰がなくても、神について何らかの仕方で「神はこうこう、こうですよ」と言えば、理性ある人間なら納得できるのではないか。これは先ほどの、アンセルムスに似ていますね。「どんな愚か者でも、理性的に言えばわかるじゃないか」と。しかしバルラアムはその点、理論的に攻めますから、神というのは感覚に絶対触れないから、もうそれは人間理性にはわからない。皆「わかった」などと言っているのは迷いであり、嘘であり、幻にすぎないと言います。

このふたりの論争は、ほとんどかみ合わないわけです。双方を互いに論難して、両者間の喧嘩だけならばいいけれども、これに加担する人間が出てきた。しかも、それが政治家たちです。いつの時代もそういうことがあるかもしれませんが、宮廷の中で二派に分かれていると、Aさんはこちら、Bさんはこちらとなって一種の内戦みたいなものになってしまいました。それで、

これではいけないというので教会会議が何回か開かれます。教会会議の中でもなかなか難しい問題なので決着はしませんが、論議の末、一応パラマスは是と見たのです。当然バルラアムの方が間違っているというところです。ただすんなりパラマス説が正しいと決まったわけではなく、政争でもありましたから、パラマス支持者が戦いで不利になると、パラマスも退けられることになります。そのように紆余曲折がありました。これは、基本的には東方教会のもつ信仰の立場から是非を判断したのだと思います。

アトス山ではいわゆる『聖山教書』というものをパラマスを中心に作成して、神のうちにこの本質と働きを分ける考えを軸にした基本的立場ともいえるべきものを発布しました。これで一応パラマスの考えを基本にした教えがビザンティンのいわば公式見解のようなものになったのです。このようなことがあり、バルラアムはビザンティンにすることができなくなつてイタリアに帰ります。それで、詩人のペトラルカ(1304・74)と知り合ったようで、ペトラルカにギリシア語を教

えた、と言われていきます。ペトラルカは親身になつて彼の行く末を案じてくれ、クラブリア地方のジェラーチェという町の司教になりました。バルラアムはカトリックに改宗し、多分カトリックの東方典礼の司教(主教)に任じられたように思います。彼は、そこで生涯を終えるわけです。

こういう論争は、表面的には、お互いに罵り合っているような感じがし、何か不毛な感じがして、意味がないのではないかと、と思いますが、よくよくこの論争を見てみると、非常に面白い問題を含んでいるのがわかります。つまりバルラアムもパラマスも正教会の修道者です。ですから、基本的な考えはもちろん同じです。しかしバルラアムはイタリアという西側の世界で育つたために、彼の教育のベースは西方的なものでしょう。名高いイタリア・ルネッサンスはまだ先の話になりますが、思潮というのは徐々に盛り上がってくるのです。ですから、ものごとを科学的に考え、論理学の重要性などが気づかれ、包括的な思惟をしていこうという立場に立つて、ビザンティンに來ました。新しい

学問潮流をもたらしたということ、ビザンティンの人には魅力的に映ったのです。ビザンティンもどこか新しいものを求めていたのです。

ところが、パラマスは伝統的なアトス山で修行し、伝統的な正教会の信仰を保持しながら、なおかつ、「人に神が知られるとはどういうことか」ということを考えている人でした。科学的には不十分かもしれないが、彼にも独特の論理はあったのです。その論理からすれば、バルラアムのそれには大きな違和感をもったのです。パラマスにとって、バルラアムの考えは伝統的な正教会のものとは異質なものである、と感じたのです。

この論争は、あくまで東方正教会という環境の中の出来事だけれども、論争者の一方がイタリア出身の学僧であったため、予期せずして西ヨーロッパ的な考え方と東のヨーロッパの考え方がこの論争の中で衝突しているというふうには受け取っています（そうではない、あくまで東方正教会の中の問題だと言われる方もあります）。しかし、そこで展開されている議論の進め方

や傾向性を見ると、どうも東と西というものがそこでぶつかり合っていると思います。特にパラマスとバルラアムの三位一体論のフィリオクエをめぐる論争では、だんだんとバルラアムが西方寄りになっていったので、なおさらのことです。

ビザンティン教会の風土においては西側が負けたというになりますが、しかし、バルラアムは西側に行くと、そこで大事にされたわけです。宗教というのは非常に微妙なものですから、宗教的な言説・宗教的なものの考え方は、その外にいる者にとっては非常にわかりにくい。部外者は宗教的懸案事項を簡単に理解する傾向があるので、「あなたの言っているのは、要するにこういうことじゃないか」と言いがちです。そんなに目くじら立てなくても、と。例えば現在喫緊の問題である「イスラーム問題」は単純に宗教の問題ではないと思います。これは政治体制の問題、貧困、経済の問題が中心だと思えます。その問題の中に宗教・宗派の問題が混ぜ合わされているのです。だから宗教・宗派の懸案事項だけで、この問題を片づけようとしても解決しな

いのです。内在的な意識が大切ですが、それにとらわれてしまうとまた二進も三進もいなくなるのです。これは、非常に難しい問題です。

このバララムとバラマスの論争にもなにかそれと似たような雰囲気があります。これは何百年も前のことで、今さらこうした論争を繰り返す人もいないだろうし、私のようにそれを勉強しているのはよっぽどのもの好きか、人生の時間を無駄づかいしているのかもありませんが、現時点で非常に大事なものはまさに今お話したことです。そういうのは個人にも言えると思います。個人というのは、育った環境が違う、受けてきた教育が違う、育った風土が違うということで、他者と出会うと、双方の考え方は微妙なズレを持っています。ですからうまく噛み合わないことが多いですが、その場合、「あいつのことは全く理解できない」とか、「あいつは自分を理解していない」というように、早く結論づけようとしてしまいます。

他者理解、あるいは宗教や思想の理解というのは、多分ものすごく忍耐が要るし、ものすごく時間がかか

るのではないか。「お互い、皆それぞれだから、それぞれでいいよね」というわけにはいかないと思います。「あなたと私は別の道を行く」では、話しあったことになりません。

自分と違う考えの中にも取り入れるべきところがあるし、いいところもあるでしょう。私の考えにもいいところがあるでしょうということで、双方の考え方を突き合わせつつ、一段何か止揚した方向に進んでいかないかぎり、宗教にまつわる、あるいは思想にまつわる対話というのは成功しないのではないかと思えます。

私は30年、40年とこういうものをやっていて、世界の出来事を耳にしたり目にしたりするときに、研究から得た結果を応用するなら、こういう場面のことかな、と思っています。現在、自分自身の問題さえ、うまく処理できていませんが、日本も世界も直面している平和の問題にどう対処していったらいいか、少しはヒントになるのではないかと思っています。

参考文献

(いちいち指摘しなかったが、以下の書を参考にして話させていただいた。ABC順)

●東方キリスト教一般

『中世思想原典集成 1 (初期ギリシア教父)』翻訳・監修 上智大学中世思想研究所+小高毅 (平凡社、1995年)。

『中世思想原典集成 2 (盛期ギリシア教父)』翻訳・監修 上智大学中世思想研究所+宮本久雄 (平凡社、1992年)。

『中世思想原典集成 3 (後期ギリシア教父・ビザンティン思想)』翻訳・監修 上智大学中世思想研究所+大森正樹 (平凡社、1994年)。

オリヴィエ・クレマン『東方正教会』冷牟田修二・白石朗訳 (白水社・文庫クセジュ、1979年)。
『エイコーン—東方キリスト教研究—』(東方キリスト教学会編) (新世社・教友社、1988年)。

久松英二『ギリシア正教 東方の智』(講談社・講談社選書メチエ、2012年)。

ジョージ・A・マローニ『東方キリスト教神学入門』大森正樹訳 (新世社、1988年)。

J・メイエンドルフ『東方キリスト教思想におけるキリスト』小高毅訳 (教文館、1995年)。

J・メイエンドルフ『ビザンティン神学——史的傾向と教理的主題』鈴木浩訳 (新教出版社、2009年)。

及川信『カトリックとオースドックス——どのように違うのか 歴史と多様性を知る』(サンパウロ、2011年)。

大森正樹『東方憧憬—キリスト教東方の精神を求めて』(新世社、2000年)。

オリゲネス『諸原理について』、小高毅訳 (創文社、1978年)。

J・ペリカン『キリスト教の伝統』(全5巻)、鈴木浩訳 (教文館、2006・8年)。
坂口ふみ『(個)の誕生—キリスト教教理をつくった人びと』(岩波書店、1996年)。

高橋保行『ギリシャ正教』(講談社学術文庫、1980年)。

●修道制・祈り
谷隆一郎『人間と宇宙的神化』(知泉書館、2009年)。

ルイ・ブイエ『キリスト教神秘思想史 1 教父と東方の靈性』、大森正樹、長戸路信行、中村弓子、宮本久雄、渡邊秀訳 (平凡社、1996年)。

オリヴィエ・クレマン/ジャック・セル『イエスの祈り』(東方キリスト教叢書 Ⅲ)、宮本久雄、大森正樹訳 (新世社、1995年)。

『フィロカリア』I・IX巻、出村和彦、橋村直樹、袴田玲、袴田渉、北垣創、桑原直己、三嶋輝夫、宮本久雄、中西恭子、大森正樹、坂田奈々絵、高橋英海、谷隆一郎、土橋茂樹訳 (新世社、2006・13年)。

K・S・フランク『修道院の歴史——砂漠の隠者からテゼ共同体まで』、戸田聡訳（教文館、2002年）。
ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』、大森正樹、宮本久雄、谷隆一郎、篠崎榮、秋山学訳（新世社、1991年）。

『キリスト教神秘主義著作集 1』（ニュッサのグレゴリオス『モーセの生涯』谷隆一郎訳、ディオニュシオス・アレオパギテース『神名論』『神秘神学』熊田陽一郎訳）（教文館、1992年）。

久松英二『祈りの心身技法——十四世紀ピザンツのアトス静寂主義』（京都大学出版会、2009年）。

V・ロースキイ『キリスト教東方の神秘思想』、宮本久雄訳（勁草書房、1986年）。

東方教会無名の修道者『イエスのみ名の祈り——その歴史と実践——』、古谷功訳（あかし書房、1983年）。

『無名の順礼者——あるロシア人順礼の手記』（完訳）、ローテル+斎田靖子訳（エンデルレ書店、1995年）。

『砂漠の師父の言葉』、谷隆一郎・岩倉さやか訳（知泉書館、2004年）。

戸田聡『キリスト教修道制の成立』（創文社、2008年）。

山形孝夫『砂漠の修道院』（新潮社、1987年）。

● パラマス関係

J・メイエンドルフ『聖グレゴリオス・パラマス』岳

野慶作訳（中央出版社、1986年）。

落合仁司『地中海の無限者』（勁草書房、1995年）。

大森正樹『エネルゲイアと光の神学——グレゴリオス・パラマス研究』（創文社、2000年）。

大森正樹『パラマスのグレゴリオスとカラブリアのパ

ルラーム——東方キリスト教における東と西』（私家

版、2014年）。

● 歴史関係

森安達也『キリスト教史 Ⅲ』（世界宗教史叢書 3）

（山川出版社、1978年）。

鷺巣繁男『イコンの在る世界』（国文社、1979年）。

● 典

礼

アンリイレネー・ダルメ『秘義と象徴——東方典礼へ

の招き——』（東方キリスト教叢書 V）、市瀬英昭訳

（新世社、2002年）。

J・A・ユングマン『古代キリスト教典礼史』（平凡社、

1997年）。

（おおもり まさき／南山大学名誉教授

※2015年4月9日に行われました。